

東アジアの日本文学研究の可能性と課題

講演・発表要旨

【基調講演】 姉妹学会締結記念講演 (12:20-13:10 23号館 23101 教室)

台湾日本語文学会と、台湾の日本文学研究

台湾日本語文学会理事長 頼 振南

台湾日本語文学会と昭和文学会が姉妹学会の提携を結んだ記念として、台湾日本語文学会を紹介し、台湾の日本文学研究の現在を報告する。

台湾日本語文学会は設立時の1989年より昨年度まで、月例会を開き、研究発表、講演会を通して、台湾の研究者の研鑽の場を提供してきただけでなく、毎年12月に学会の年度大会として国際シンポジウムを開催し、台湾における日本語・日本文学研究の気運を作ってきた。そして、その気運は、現在、多くの大学、学会でのシンポジウムとして広がり、学术交流の豊かな実を結んでいるように思われる。

1895年、台湾で日本語教育が始まってから、120年以上の歳月が経ち、日台は様々な分野で緊密な交流を行ってきたのである。そのような時代の流れの中、経済、文化、旅行などにおける頻繁な交流が行われた外、文学においても、翻訳や入門書や学術著作などがどんどん誕生してきた。したがって、120年間の日台関係を探究する場合、日本文学における研究も一つの手がかりなのではなかろうか。

(輔仁大学教授)

【研究発表1】 イメージの台湾・南方 (第1会場 13:20-16:10 9号館 9101 教室)

昭和初年の『少女の友』にみる台湾イメージ——「台湾新八景」との関連を中心に

宮内 淳子

『少女の友』(1930年9月)に掲載された「台湾新八景」(絵・詩、深谷美保子)を、台湾表象のひとつのかたちとして捉え、この時期の少女雑誌における内/外の認識のあり方を探る。それまでの少年雑誌には台湾を「蕃地」として、文明/野蛮という区分けのもとに冒険物語を構築するパターンがあった。

「台湾新八景」では、風景に配して描かれた先住民・漢族系台湾人・日本人の少女たちの表情に差異がない。この現実を無視した同一性は、一見別ものに見える冒険物語と同じ背景を持つのではないか。他の台湾関連の記事や読者の投稿なども取り上げて、『少女の友』が伝える台湾像を踏まえて考えたい。また、1927年には新しく日本八景と台湾八景が選定されており、風景の持つ意味も考慮する。

(東洋大学・日本女子大学・早稲田大学非常勤講師)

戦後日本の「大衆文芸」における「台湾」

——50年代から70年代にかけての日影丈吉の作品を中心に

李 文茹

「異色のミステリー作家」であり「戦後日本最高の幻想小説の書き手」でもあると評される日影丈吉は、応召された翌年の1944年に台湾に渡り1946年に復員するまで近衛捜索連隊として2年余り台湾に滞在した。その経験は戦後、作家として本格的に創作活動を始めた日影の生涯の文学世界を育む土壌ともなる。「金果記」(『宝石』1951)を皮切りに、台湾を舞台とした短編作品集(『華麗島志奇』1975)や長編作品(『内部の真実』(1959)や『応家の人々』(1961)など)を数多く発表した。

今回の発表では先住民を含めた台湾現地の人々を描く際、しばしば重要なテーマとなる「駐在軍」と「性」の問題に焦点を当てつつ、50年代から70年代にかけての日影の台湾関連作品を中心に分析を行う。それを通して戦後日本の「大衆文芸」における「台湾」について考えたい。(淡江大学副教授)

南方の女の記号——八木義徳「女」をめぐって

阮 文雅

八木義徳（1911-1999）の「女」の初出は1956年5月の『新潮』である。同年河出書房から『女』という短篇作品集に収録されて出版された。1977年には旺文社文庫版の短篇作品集『女』に再録される。二度にわたり表題作にされたこの作品は、作者の意欲や愛着が感じられるにもかかわらず、文学研究の分野では看過されてきた。「女」は、三人称視点で語られ、日本人報道班員「杉」が戦時中の南方体験を回想しながら、酒場で出会った「支那」女性「阿英」との恋愛や性的遍歴をめぐる小説である。南方報道班員としての男の世界を視座に、南方で出会った女性との恋や性を一方的に語る「女」は、意図的に男の言説で構築されている。理想的な「南方の女」との恋も、男の語りの中にしか存在していない可能性を垣間見せている。本稿は、昭南に徴用された作家の他作品も視野に入れて、「女」という作品の記号性を探り直そうとするものである。

（東呉大学副教授）

植民地末期、朝鮮半島における日本語文学の再編と南方表象

鄭 炳浩

植民地時代、朝鮮半島には所謂在朝日本人による日本語文学と朝鮮人作家による日本語文学が創作されていたことは周知のことである。1940年以後植民地時代の末期になると、在朝日本人の日本語文学と朝鮮人作家の日本語文学は「国民文学」というかたちで混在しながら国策文学を量産していた。本発表は、1940年代帝国日本が東南アジア地域へとその勢力を拡張した際、朝鮮半島の日本語文学者はこの南方という地域にどのように反応しながらそのイメージを想像していたかを分析する。このような考察をとおして1940年代朝鮮半島の日本語文学における他者認識の特徴を明らかにするところに本発表の目的がある。

（高麗大学教授）

【研究発表2】移動とネットワーク（第2会場 13:20-16:10 9号館 9104教室）

田村俊子『女声』の背景——1920年代と1940年代の日中女性関係の温度差を軸にして

山崎 眞紀子

田村俊子（1884-1945）は晩年、日中戦争下の上海で中国人女性のための雑誌『女声』（1942-1945）刊行に精力を費やした。中でも読者交流欄である「信箱」では、教育も受けさせられずに親に決められた意に沿わない結婚を強いられ、自我を押し殺して生きなければならない苦悩が綴られた読者からの声が目立つ。俊子は彼女らに経済的自立を訴え、そのためには教育を受けることだと力説しているが、逆に見えてくるのは無力化された女性像である。果たして当時の中国人女性はそのように無力化された存在だったのだろうか。

1926年から1927年にかけて中国を周った東京朝日新聞社の女性初の記者・竹中繁の旅日記をもとに、1920年代と40年代の、日中戦争をはさんだ女性に向ける視線の異なりを考察してみたい。

（日本大学教授）

汪兆銘政権勢力下の日本語文学——上海・南京・武漢を中心に

木田 隆文

戦時上海の日本語文学・文化状況の解明は、近年長足の勢いで進んでいる。しかし対日協力政権である汪兆銘政権が首府とした南京、長江中流の中核都市として早くから日本租界が設置された武漢など、上海周辺の各都市（＝汪兆銘政権勢力下）で展開した日本語文学については、未だほとんど検討がなされていない。そこで本発表ではまず、これら各都市に展開した日本語文学・文化の状況を、『武漢文化』等の資料紹介を兼ねつつ報告したい。そのうえで現地における日本側の文化統治の影響や、各都市間の文化的交流の実態とそこに生じた文芸ネットワークにも検討を加え、これまでの〈上海研究〉の外郭をいささかでも広げることができればと考えている。

（奈良大学教授）

ディアスポラを生きる——武田泰淳『風媒花』の意味

李 征

武田泰淳が上海から日本に戻って書いた小説『風媒花』は、戦後文学、さらに昭和文学の遺産の一つとして読まれる。主人公峰の背後に横たわっている巨大な中国がどんな意味をもっているかということは、今の時代になってもあらためて考え直す価値がある。本発表では「風媒花」のように生きる登場人物を、ディアスポラの視座からとらえてみることにする。「国家」、「民族」、「戦争」……過ぎ去った歴史の重荷は、さらに「記憶」、「言語」、「翻訳」などの問題に置き換えられ、繰り返されていく。そこには作家武田泰淳の中国体験の中核も認められる。
(復旦大学教授)

「満洲」とかかわる台湾人——謝介石と鍾理和から見る

林 雪星

近代の日本は日清戦争から台湾を植民地として直接的に統治した。さらに、台湾の統治経験を生かして朝鮮を合併し、満洲（中国の東北三省）を間接的に統治した。51年にもわたる日本統治期に、台湾人はいかに日本、満洲、中国を越境し、生きる道を求めたか。本発表では、謝介石と鍾理和を通して、近代の日本と台湾との関係を探究する。

ここで謝介石と鍾理和を取り上げる理由は三つある。一つ目は二人とも日本統治期に「満洲」に渡って生きる道を求めた台湾人であること。二つ目は「満洲」に渡航した台湾人は「日本人」の身分として扱われ、就職において「差別待遇」の対象とならなかった事情が分かること。三つ目は逆に、台湾での就学・就職の困難や、その際の差別の存在が二人の例から明らかになることである。当時「満洲国」は、高等教育を受けた台湾人が活躍できる新天地となったのであった。

1879年に台湾新竹に生まれた謝介石は、清朝の遺民といっても差し支えない。1895年に台湾は「下関条約」で日本の植民地になり、17歳の謝介石は国籍を日本籍に変えた。日本の明治大学に留学する間、「祖国」意識を呼び戻し、中国の吉林へ行って働いたが、当時の国民政府に失望した彼は、「満洲国」の溥儀のために力を尽くすべく方針転換し、1932年には「満洲国」の「駐日大使」として活躍することになる。清朝、日本、中華民国と国籍を三度変えた謝介石は、終戦後、漢奸として監獄に収容されるも、1948年に釈放され、1954年に北京で世を去った。

1915年に台湾屏東県に生まれた鍾理和は、「倒在血泊中的筆耕者」と言われる小説家である。「祖国」（中国）に対する意識は、日本人の恩師や二番目の兄、父の中国でのビジネス体験によって育まれた。満洲渡航の理由には、「同姓婚」を反対されたことや、日本の植民統治への反抗があった。彼は8年間中国に滞在する中で、日本に占領された「祖国」（北京）の胡同生活者の「劣等性」を「夾竹桃」に詳しく描き、「祖国」への裏返しの愛情を語った。終戦後、北京にいて台湾人の身分により漢奸と見なされた彼は、かつて憧れた「祖国」に裏切られた幻滅を「白薯的悲哀」に綴っている。
(東呉大学教授)

【研究発表3】戦後文学を捉え直す（第3会場 13:20-16:10 9号館 9201教室）

マテリアル

〈物質〉としての日本語——台湾の日本語作家・黄霊芝の言語観

下岡 友加

黄霊芝（1928-2016）は日本統治時代に日本語教育を受け、戦後の国民党統制下で日本語創作を行い続けた俳人、作家である。台北俳句会では創立時から逝去するまで45年にわたって主宰をつとめ、『台湾俳句歳時記』によって第三回正岡子規国際俳句賞を受けた。黄はフランス語、スペイン語、中国語を創作言語として用いながらも特に日本語への愛着を語り、自らを「親日」ならぬ「親日本語人」と位置づけている。黄の文学はかつての宗主国＝日本の言語規範から脱し、自らの目的に合わせて言語を変形、破壊、新たに創造するものであり、「間言語」空間を生きる今日の作家たちの営為と通じるものと言えよう。そうした黄の言語観の一端を主に俳句の実践を通じて見ることとする。
(広島大学准教授)

「もう一つの戦後文学」としての「ハードボイルド・ミステリ」

——船戸与一が描く「植民帝国日本」の「記憶」

坂元 さおり

本発表でとりあげたいのは、日本のハードボイルド作家・船戸与一（1944-2015）の作品群である。船戸と同世代のハードボイルド作家・藤田宜永は、戦後日本に「ハードボイルド」というジャンルを持ち込んだ大藪春彦（1935-1996）や生島治郎（1933-2003）といった作家たちが「旧大日本帝国の植民地」からの帰還者であり、彼らの壮絶な戦争体験・引き揚げ体験が日本語での「ハードボイルド・ミステリ」を書かせ、それは「もう一つの戦後文学の形」であった、と述べている。またフランス文学研究者で船戸与一論も書いている小田光雄も同様の指摘をした上で、船戸こそ大藪や生島といった日本のハードボイルド第一世代作家たちの問題意識を強く受け継いだ作家と位置付けている（『船戸与一と叛史のクロニクル』1997）。

船戸は1970年代にルポルタージュ作家として文筆活動に入るが、ハードボイルド作家としては『非合法員』（1979）がデビュー作となる。以降、「第三世界」の民族抗争をしばしば取り上げていくが、1995年『蝦夷地別件』以降、晩年に至るまで、日本及び東アジアの「歴史」をテーマとする作品を次々と発表していく。その際、執拗に問われるのは現代東アジアに流れる「植民帝国日本」の「記憶」なのである。本発表では特に「台湾」との関わりでこの問題を見ていきたい。（輔仁大学副教授）

現代韓国文学の〈周縁〉から考える〈自己語り〉

梅澤 亜由美

人は、なぜ自己の体験を小説という虚構のフィルターを通して語るのだろうか。一般的に、自己やその体験を記すためのジャンルは、日記や手記、エッセイや自伝と小説以外にも数多く存在する。そして、それらのジャンルは事実を記録するという点では、小説より適しているとも言える。私小説、さらには自伝的小説が盛んな日本に比べて、韓国では小説による〈自己語り〉がそれほど盛んではない。だが、その〈周縁〉とも言える〈在日朝鮮人文学〉や〈脱北文学〉に目を向けると、さまざまなジャンルによる〈自己語り〉が見られ、その中には自伝的な小説も存在する。本発表では、これら〈周縁〉の人々の〈自己語り〉、および自伝的な小説に注目し、自己の体験を小説で語るこの意味について検討する。（大正大学准教授）

左へ？右へ？——大江健三郎「純粹天皇」作品群試論

呉 佩珍

1960年代、大江の「セヴンティーン」（1960）、「政治少年死す」（1961）等の作品では、「性」と「暴力」をとおして、天皇のイメージが織り重ねられ、戦前、戦後の「天皇制」をめぐる価値観の倒錯が強烈に反映されている。また、同時代の日本文学において展開されていた天皇言説、例えば三島由紀夫の「二・二六事件」三部作に対照するならば、大江の饒舌な叙述、そして倒錯とアイロニーにあふれる手法で描かれた「天皇」言説とは、まさに大江文学における「周縁からの想像力」という特徴を現している。

もしも、日本戦後文学における「天皇」言説が現われたタイミングを検証するならば、1960年代こそが重要なターニングポイントだと気づく。1960年代初頭、日米安保条約が締結される前後、日本内部のイデオロギーが混沌状態を呈し、文学表現の自由もその混乱状態に巻き込まれた。そのため、文学作品にもそれぞれ当時のイデオロギー論争がうかがわれ、とくに「天皇」をめぐる重層的かつ複雑な論述が生じていたことがわかる。本論文の目的は、大江健三郎「セヴンティーン」（1961）、「政治少年死す」（1961）、そして「みずからわが涙をぬぐいたまう日」（1971）という「純粹天皇」テーゼの作品群をふまえながら、1960年深澤七郎「風流夢譚」事件が引き金となった「天皇制」論争という時代背景から、大江文学の重要なテーマ「純粹天皇」の言説を検証する。と同時に、三島由紀夫の「文化概念としての天皇」という言説を対称軸にしながら、大江文学における「天皇」言説と、戦後日本文学におけるその位置づけを探る。（政治大学副教授）